動技術史研究は、その必要性が主張されてから40年を過ぎた現在においても、十分な蓄積をみない。
本発表は、これまでの運動技術史に関する研究を総括し、その成果を整理するとともに、今後の課題について提示することを目的とした。その結果、①運動技術の変遷過程と各運動技術の特徴、②ルールや用具・施設の変遷と運動技術との関係、③戦術と運動技術との関係、④運動技術の変遷に影響を与えた人物や書物について解明されてきたことがわかった。一方、運動技術の発生や発展にかかわる思想に着目した研究がこれからの課題であると思われる。

○SORIDOVAL MAJA（明治大学）
ドイツにおいても日本柔術・柔道の紹介が日露戦争後期から始まる。日本人柔術家が異種格闘試合で柔術の強さを示し、特に柔術のメディアでの取材と柔術教本の出版も始まる。そこで問題にする「ドイツ柔術」とは、1906年から柔術の指導を職業としていたエリヒ・ラーンを中心にドイツ文化に同化された柔術を意味する。ラーンがハンコック・ラン「嘉納柔術（柔道）、柔術を学び、ラーンがハンコック・東「嘉納柔術（柔道）、の技法をレスリングとボクシングの技を加えて護身術にアレンジした柔術は、1910年代から警察や軍隊の訓練所に採用され、警察官と軍人の間に広がる。1920年代に入ると、連盟も結成され、柔道は異なった競技ルールもでき、柔術の競技化とその大衆化も始まる。ラーンの「目に見えない武器柔術」が出版された1926年になると、「ドイツ柔術」が一般に定着され、警察と軍隊の訓練所だけでなく、スポーツクラブと大学柔術部にも盛んに行われる。しかし、組織の面で統一がなく、競技スポーツとしての欠点も多いという点は、1920年代まで徐々に進歩的な存在の柔術に道を開く。1932年に戦前の「ドイツ柔道連合」と「欧州柔道連合」が結成されると同時に柔術と柔道は別々に展開することになる。